神奈川県小田原市方言におけるラ行音の撥音化

木川 行央・久野 マリ子
神田外語大学・國學院大學

ラ行音の撥音化は、関東全域はじめ全国に広く見られる現象であるが、神奈川県小田原市の方言では他の方言より多くの環境で撥音化が見られる。本稿では、この撥音化の現象の現状を、多人数調査によって確認した。その結果、小田原市方言では、他の関東方言によく見られる、n音で始まる形式の前だけではなく、他の音で始まる形式が後接する場合にも撥音化すること、そしてこの現象は現在の若い世代においても見られること、その使用には性差があること、その原因として、撥音化した発音に対する意識が関与していることを明らかにした。

1.はじめに

東京語については、共通語としてまた伝統的な東京方言として、多くの研究がある。それに対して、その周辺の地域、いわゆる首都圏の言葉は、方言辞典や言語地図など語彙を中心とした事象の収集はあるが、それ以外の現象については、埼玉特殊アクセントなど一部を除いて、東京方言と共通ないし近い現象が多く見られるためか、その実態が十分に明らかにされているとは言い難い。しかし、この地域の言葉は、東京方言の古い相を示す場合がある一方、ジャンやカッタルイ、ウザッタイなどが東京方言の中に入り使用されるようになるという事象も見られるなど、東京語さらにはそれを基にした共通語と密接に関係している。従って、東京方言・共通語に

Scientific Approaches to Language, No. 11, March 2012, 89 – 101,
神田外語大学言語科学研究センター.

ついての考察には、これらの地域の言葉についての調査研究が不可欠であると考えられる。また、この地域は、現在、東京への政治・経済・文化などの一極集中による人口の増加、言い換えれば他地方からの移住が多く、東京への通勤圏が広がっている。そのため、首都圏の言葉は、東京方言も含む伝統的な各地の方言、さらに各地から入ってくる共通語化・東京語化した方言話者の言葉、共通語化・東京語化した移住者の２世以降の世代の言葉が、絡み合うという複雑な状況を呈している。

このような首都圏のことばの実情を探る最初の段階として、伝統的な方言の実態とその変容の姿を見ることを目的とした調査を、神奈川県小田原市において実施した。小田原市は、神奈川県西部いわゆる西湘の中心地であり、城下町であるとともに宿場町として江戸時代から栄えた町である。東京からは若干距離があるが、鉄道の整備などにより、東京・横浜への通勤・通学も可能である。方言区画の上では、東條(1954)に従えば、神奈川県全体が関東方言の中の西関東方言になる。神奈川県内の区画については、語彙・文法の分布を基にした区画が日野(1964)に示されているが、それによれば小田原市は相模川西部方言の足柄方言となる。しかし、「県内にそれほどきわだった地域差が現れ」ず、「音声・音韻＝音節の種類やその現れ方という側面から見ると、東京語と大差はない」（日野 1984:277）。ただし、足柄方言の俚言の中には静岡県の俚言と共通のものがある場合がある(日野 1984:281－282)。つまり、上述のように、基本的には東京方言と共通する点が多いが、語彙や一部の文法事象については、静岡県と連続する地域であるということである。

本稿では、小田原調査の結果の内、動詞に助詞・助動詞が接続する際に見られるラ行音撥音化の現象についての結果を見ていく。

2.調査について

調査は2011年9月に小田原市穴部において行った。穴部は、小田原駅から約3㎞、伊豆箱根鉄道大雄山線で7分程度の位置にある。 調査は面接法で、調査項目はアクセント 55、音韻36、文法9, 語彙4項目である。これらの項目は2011年1月に予備調査で明らかになった事象を中心とし、さらに1982年と1983年に、東京在住者(初年度の対象者は205名、二年度は 1037 名)を対象に東京語のゆれを調査した国広・中本(1984)の調査項目を参考に選定した。

話者は、小田原市穴部生え抜きを原則としたが、中には穴部近郊の方で協力いただいた方もある。86歳から11歳までの72名で年代、性別と人数は表1の通りである。

表1　話者

年齢	男	女	小計
10代	2	6	8
20代	1	5	6
30代	1	0	1
40代	8	6	14
50代	9	4	13
60代	5	7	12
70代	6	7	13
80代	3	2	5
合計	35	37	72

なお、本稿では方言形の表記をカタカナ書きとする。上記のように、神奈川県方言の音声は地域的な差がほとんど無く、その発音も東京と大差はないので、カナ書きの音の発音は東京語と同様の発音と考えて良い。

3. ラ行撥音化

語中のラ行音が、撥音に変化するという現象は、関東方言を

始め全国で広く見られる現象である。東京方言でも、「分からない」がワカンナイ、禁止の「するな」がスンナ、「来られない」がコランナイのように、この現象が見られる。上野編（1989）は「ラ、ル、レがナ行音節の直前」で観察され、「形態素の内部ではなく、形態素と形態素が接続したときに見られる」ものである、とする（上野編:72）。大橋（1974）には、関連する地図として「わからない」、「降らなければ」、「行かなくてはならない」の3枚がある。これによれば、「分からない」は関東全域で広く、ワカンナイとなり、「行かなくてはならない」の「ならない」も房総半島を除きナンナイが分布する（小田原の調査地点ではナラナイの言い方が得られていない）。それに対し、「降らなければ」は、小田原・秦野で「ら」が撥音になるという結果が得られているが、関東全域でみると、西部にはあまり撥音化が見られず、栃木・茨城・千葉、群馬県東部が中心となっている。このように撥音化の現象は、環境により差はあるが、東京を含む関東地方に広く見られる。

小田原市方言については、大橋（1974）によって上記の環境で撥音化することが確認できるが、日野（1984）に「南部でル語尾の活用語が撥音化するのも一つの特徴か（アルカラ→アンカラ。アルヨ→アンヨなど（略））」とあるように、東京方言とは異なり、ナ行音節の前以外の環境でも撥音化が見られる。今回はこの点に着目し、ルの撥音化を中心に、調査を行った。

今回調査したのは、以下の11の環境である。

1　私には<u>分からない</u>。
2　明日雨が<u>降らなければ</u>行こう。
3　そろそろ<u>寝るか</u>。
4　<u>寝るなら</u>ここで寝て良いよ。

5　ここにあるよ。
6　そんなことすると、怒られるよ。
7　私は先に寝るから、後は頼む。
8　あとは掃除をするだけだ。
9　寝るのには、まだ早い。
１０　説明するまでもない。
１１　さあ寝るぞ。

調査は、上記の文を示し、下線の部分を方言訳して貰った後、撥音化した形式を示し、それを「使う」か、「聞いたことがある」か、「聞いたこともない」か答えて貰った。以下では、後者の結果を中心に見ていき、必要に応じて、前者の回答を見ることとする。

なお、今回の調査については、動詞の多くが終止形が２拍の語であること、変化するラ行の音が「る」に偏り、他の音が少ないこと、調査項目が 11 で少ないことなど、実態の把握には調査がさらに必要であるが、ひとまずの傾向を見ることは可能であろう。

3.1 全体の傾向

まず、全体の傾向をみておく。表１は、使用あるいは聞いたことの有無に関する意識の調査結果を、「使う」という回答の割合が高い順に示したものである。なお、話者の総数は 72 名であるが、意識についての確認をしなかった項目がある話者もある。そのため、実数の総和が 72 にならない項目もある。また（　）内はパーセンテージをあらわすが、未確認の話者がいる場合は、その未確認者を総数に入れないで計算している。また、調査項目は 11 であるが、複数の形式について確認した項目もあるので、13 形式について確認している。

表２　撥音化（全体）

	語形	使う	聞いたことがある	聞いたこともない
1	ワカンナイ（分からない）	65（94.2）	4（ 5.8）	0
2	フンナケレバ（降らなければ）	34（50）	27（39.7）	7（10.3）
3	ネンノニ（寝るのに）	33（49.3）	22（32.8）	12（17.9）
4	ネンナラ（寝るなら）	34（48.5）	26（37.1）	10（14.3）
5	スント（すると）	34（48.5）	26（37.1）	14（19.4）
6	アンヨ（あるよ）	23（32.4）	32（45.1）	16（22.5）
7	スンダケ（するだけ）	23（32.4）	27（38.0）	21（29.6）
8	ネンカラ（寝るから）	19（27.9）	31（45.6）	18（26.5）
9	スンマデモ（するまでも）	18（26.1）	28（40.6）	23（33.3）
10	フンナケリャ（降らなければ）	16（23.5）	32（47.1）	20（29.4）
11	ネンゾ（寝るぞ）	16（23.2）	33（22.5）	20（29.0）
12	ネンカ（寝るか）	13（18.6）	30（42.9）	27（38.6）
13	シント（すると）	4（ 5.6）	14（19.4）	54（75）

表２のように、ワカンナイの使用率が最も高く、ほぼ全員が使用すると回答している。それに対し、ワカンナイ以外の形式は使用者が半数以下になる。その中で上位にあるのは、上野編（1989）でも指摘のある、後続の形式がｎ音で始まる場合である（なお、フンナケリャは後続形式がｎ音で始まるが使用者は少ない。これはフンナケレバの使用者が多い点から見て、ナケリャという後続形式があまり用いられないという点によるものと考えられる）。

表２の結果でも分かるように、後続の形式がｎ音以外で始まる場合でも、撥音化することがあるのは、東京語で一般的はあまり見られない点である。上野編（1989）では「ルがカ行、タ行の前で促音化することもある。東京およびその周辺のくだけた言い方で、アッカ（有るか）、ソースット（そうすると）などがある」としているが、方言訳を聞いた際、「すると」、「寝るか」でスット、ネッカを回答したのは20歳代の1名のみ（回答者は同一）、「寝るから」でネッカラを回答したのは同じく20歳代の4名のみである。撥音化しない話者の回答は、スルト、ネルカ、ネルカラがほとんどである（「寝るか」

についてはネヨーカ、ネヨッカなど、「すると」については「する」が一段動詞化した「シルト」などもみられる)。このようにヨやゾ・マなどが後続形式のはじめに来る場合にも一定の割合で撥音化が見られることは、やはり小田原市方言の特徴と考えて良かろう。ただし、インターネット上の掲示板やブログなどには、書いた人の出身や年齢など属性は不明であるが、スンヨ（するよ)、アンゾ（あるぞ)、スンマデ（するまで)などが見られる。他地域での状況など確認の必要がある。

なお、シントの使用者が少ないのは、トの前で撥音化しないからではなく、「する」が一段活用化している点による。

3.2 性差

3.1 では全体の傾向を見たが、ここでは男女による差について確認する。

まず、使用者のもっとも多いワカンナイ(図 1)は、確認した男性の 97.3%、女性の 90.6%が使用し、有意な差は認められない。また、その次に使用者の多いフンナケレバ(図２)も男性 55.6%、女性 46.7%で、有意な差とは言い難い。しかし、それ以外の多くの形式では男女差が見られ、全体的に撥音化は男性に多く見られる。

たとえば、3 番目に使用者の多いネンナラ（図３）を使用すると回答したのは、男性が 64.9%いるに対し、女性は 30.3%に過ぎない。そして「聞いたこともない」という回答は男性 8.6%に対し、女性は 28.1%にのぼる。また、その次に使用者の多いスント（図４）は、男性の 60.5%が使用すると回答しているのに対し、女性は 17.6%である。ただし、「聞いたこともない」という回答は男性 21.1%、女性 17.6%と差は大きくなく、かつ男性の方が多い点がネンナラとは異なる。

このように、男女差が見られるのは、撥音化した形が「悪い言葉」であると、女性に捉えられていることによるのでは

図1　ワカンナイ(性差)

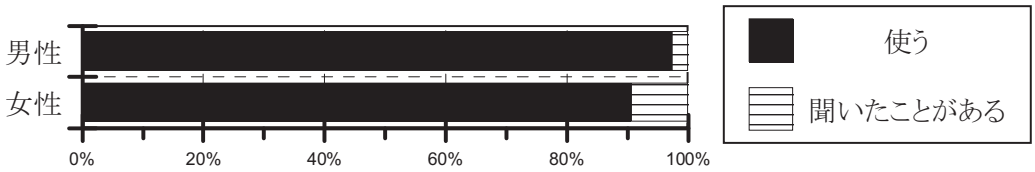


図２　フンナケレバ（性差）

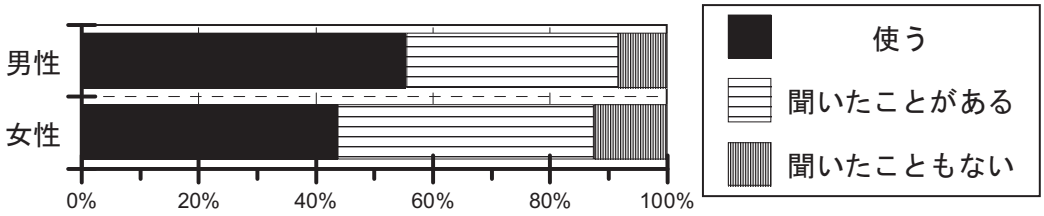


図3　ネンナラ(性差)

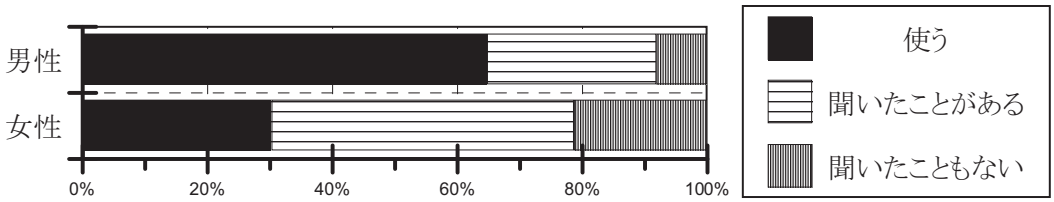
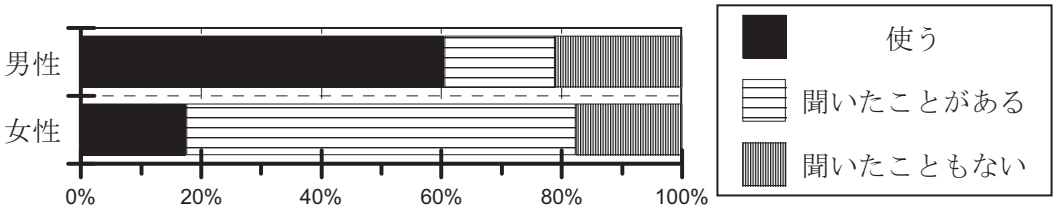


図４　スント（性差）



ないかと考えられる。女性は、この撥音化した発音を方言の「悪い言葉」と捉えている場合が多い。東京でもワカンナイなどはよく用いられ、少しくだけた話し言葉の言い方として定着しはじめている、という認識がまだうすいようである。従って、女性の「悪い言葉」をさけるという意識が、今回の、意識を問う調査の結果に反映している可能性が高く、実際の使用率はこれよりも高いと推測される。このような女性の方言に対する意識は、今回の調査で行った、推量・意志勧誘に

用いられるべーについても見られ、女性で用いるとした話者は男性に比べ少なかった。ちなみに、使用の確認をした形式のうちもっとも使用者の少ないシントを使用するとした4名全員が男性であることも、この意識が影響していると考えられる。

3.3 年齢差

図５　ワカンナイ（年齢差）

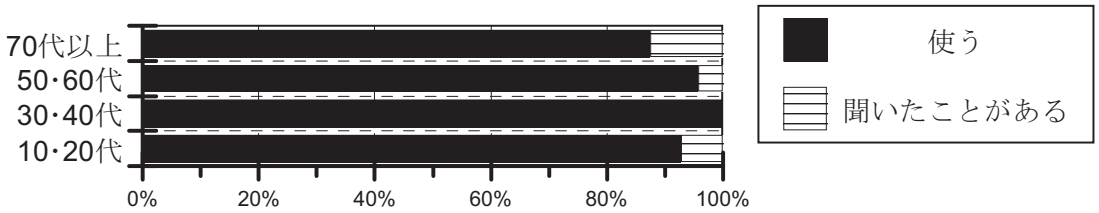
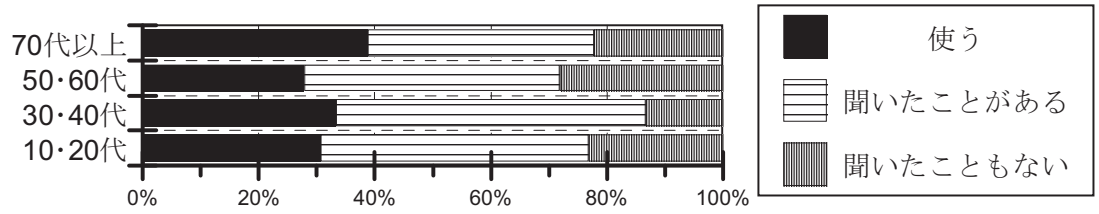


図６　アンヨ（年齢差）



ラ行音撥音化の年齢差は、後続形式により異なる。まず、ワカンナイは、年齢差が見られない。使用者数は少ないが、アンヨもさほど年齢差が見られない。

その一方、若年層特に10・20代で使用者が減少するものもある。たとえば、ネンカ（図7）は30代以上ではさほど年齢差が見られないが、10・20代で使用すると回答したのは1名のみである。ただし、上の世代でも使用者の実数は少ないので確実にその傾向があるとは断言できない。フンナケリャも30代以上では数名の使用者があるが、10・20代では使用者がなくなる。この場合は、上述のように撥音化だけではなくナケリャが後接することによる可能性が高い。ネンカの場合は、後接するｋ音の影響も考えられるが、同じｋ音が後接するネ

ンカラ（図 8）は、10・20 代でも使用者の率は減っていないので、音環境によるとは考えにくい。

これ以外の環境においては、ワカンナイなどと同様、年齢差を認めにくい。たとえば、フンナケレバ（図 9）は、一見若年層に向かって増加しているように見えるが、他の環境の

図７　ネンカ（年齢差）

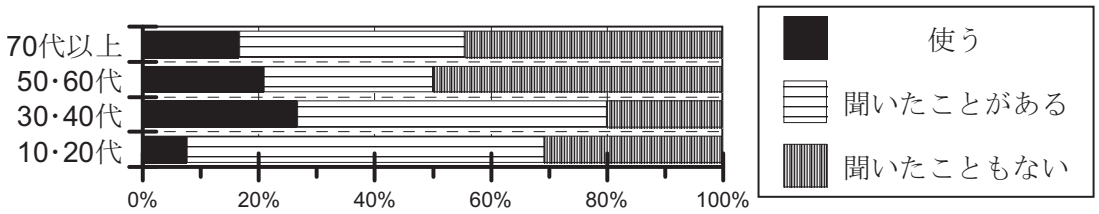
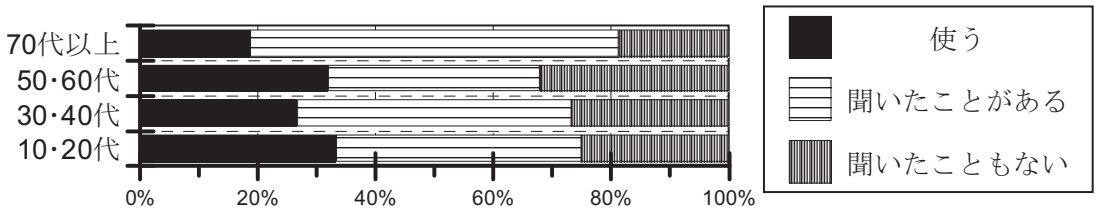


図８　ネンカラ（年齢差）



状況から見て、一概にそのようにいうことは出来ない。上のフンナケリャと同じく、後接するナケレバの影響と見ることもできるが、ネンノニも同様であり、理由は別に考えるべきであろう。さらに、スント（図１０）は 50･60 代と 10・20 代に使用者の割合が高く､70 代以上と 30･40 代の割合は低い。70 代以上の使用者の割合が、他の世代に比べ低い場合が、スントに限らず多いが、これは性差のところで述べた、意識すなわち、撥音化した発音は「悪い言葉」であるという意識の反映である可能性が高い。30･40 代の割合の低さの理由は不明である。

図９　フンナケレバ（年齢差）

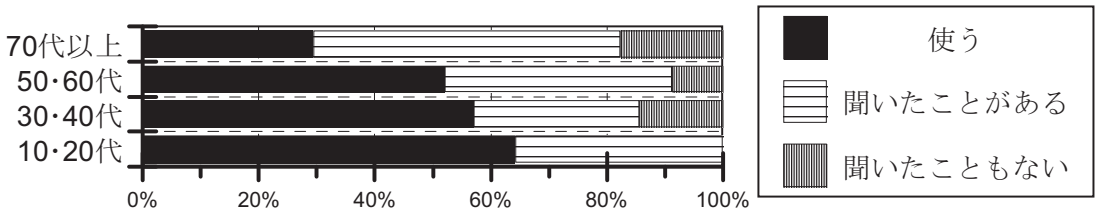
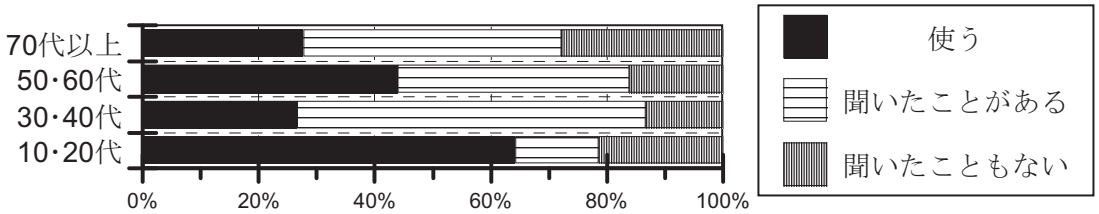


図10　スント（年齢差）



4.まとめ

以上、小田原における多人数調査の結果の中からラ行音の撥音化に関する項目の結果を見てきた。小田原市方言においては、東京を含む関東方言と同様、ラ行音が撥音化する現象が見られた。そして、その撥音化は、後接する形式がｎ音以外で始まる場合にも見られ、東京方言などよりも多くの環境で起こることを確認した。さらにこの現象は、若い世代においても比較的良く用いられること、男女によりその使用（少なくとも使用に関する意識）に差があること、その差は、この現象が「悪い言葉」と捉えられていることによるものである可能性があることを示した。ただし、多人数調査とはいっても、まだ話者の数は少なく、おおよその傾向を示すに留まっている。また、アクセントなど他の現象に関する調査も行ったため、ラ行音の撥音化に関する項目は少ない。さらに他の形式が後接する場合、同じ形式が後接する場合でも、前接する動詞の長さや音環境が異なる場合などについても、調査する必要があろう。これらについては、今後の課題としたい。また、他の項目の結果については、稿を改めたい。

調査参加者は、木川行央（神田外語大大学院）、久野マリ子、三樹陽介、本間美奈子、竹内はるか、坂本薫、中村明裕（以上、國學院大）である。

本研究は平成23年度科研費基盤C「首都圏方言の実態に関する基礎的研究」（代表：木川行央）による。

参考文献

上野善道（編）. 1989. 『日本方言音韻総覧』小学館.

大橋勝男. 1974. 『関東地方域方言事象分布地図　第一巻音声』桜楓社.

久野マリ子・木川行央.刊行予定. 「神奈川県小田原市方言におけるいくつかの音声現象の動向」『神田外語大学大学院紀要　言語科学研究』17.

東條操. 1954. 『日本方言学』吉川弘文館

日野資純. 1964. 「神奈川県の方言区画」日本方言研究会（編）『日本の方言区画』225-247 東京堂.

日野資純. 1984. 「神奈川県の方言」『講座方言学５』273-302 国書刊行会.

増村照子. 2000. 「『西洋道中膝栗毛』における江戸語の考察－語連接上の音韻現象〔撥音化〕の実態について（その一）」『道都大学短期大学部紀要』37.(1)-(9)

増村照子. 2000. 「『西洋道中膝栗毛』における江戸語の考察－語連接上の音韻現象〔撥音化〕の実態について（その二）」『道都大学短期大学部紀要』36.(1)-(11)

室山敏昭. 1970 「鳥取県東伯郡羽合町方言のラ行音節の促音化・撥音化現象について」『国語国文』39(9)39-60.

（木川）
261－0014
千葉県千葉市美浜区若葉 1-4-1
神田外語大学
言語科学研究科
kigawa@kanda.kuis.ac.jp

（久野）
150－8440
東京都渋谷区東 4-10-28
國學院大學
文学部
kuno@kokugakuin.ac.jp